

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520580

研究課題名(和文) 漢方腹診書・鍼灸流儀書に関する書誌研究

研究課題名(英文) Bibliographical Study for *Kampo* Literature of Abdominal Diagnosis and Japanese Acupuncture Styles

研究代表者

長野 仁 (NAGANO HITOSHI)

神戸大学・大学院医学研究科・医学研究員

研究者番号：40257837

研究成果の概要(和文)：

中国を起源とする漢方だが、腹診と小児鍼は日本で発達した診断・治療法である。本研究の第一の目的は、日本における腹診の発達の歴史の解明である。加えて、もう一つの日本発の小児鍼法も解析対象である。

本研究の成果は、腹診の起源と変遷と、小児鍼成立に至る過程、の二点を解明した事である。加えて、資料の電子化とオントロジー解析も実施し、更なる研究に資するようにした。

研究成果の概要(英文)：

Kampo originates in China. However, abdominal diagnosis and pediatric acupuncture has uniquely developed in Japan. The primary purpose of our research is to trace the development of Japanese abdominal diagnosis. In addition, we also analyzed Japanese unique pediatric acupuncture.

Our findings are that we revealed the origin and the changes of the abdominal diagnosis and the establishment of pediatric acupuncture. For the further findings, we computerized the materials that we used and constructed and analyzed *Kampo* ontology.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本史・史料研究

キーワード：腹診・書誌学・漢方・鍼灸

1. 研究開始当初の背景

伝統医学の臨床と研究を国家レベルで推進している中国には、各家学説史・臨床文献学という分野が確立している。これとは対照的に、日本における医学史研究、とりわけ漢方・鍼灸の領域には、かかる分野が整備されているとは言い難い。本研究の背景には、日本医学史の各科学説史・臨床文献学の不在と

いう懸案がある。その先鞭をつける課題として、腹診や小児鍼という日本で独自の発達を遂げた診察法・治療法が最適である。加えて、この分野への情報科学的手法の導入による解析系確立についても検討した。

2. 研究の目的

腹診とは、腹部の触診によって病気の全体

像を把握する診察法である。中国の中医学や韓国の韓医学（東医学）では、病状の一部として腹を診ることはあっても、日本の東洋医学（漢方・鍼灸）のように病気の全体像を腹で診るところまで展開しなかった。このような質的転換が、いつごろからどのように始まり（起源）、何を根拠に誰が発展させたのか（変遷）、歴史的経緯が十分明らかにされていないのが実情である。各国固有の歴史と風土の中で培われてきた伝統医学を正しく継承し、さらなる発展をさせるには、医科学研究（実験研究・臨床研究）に加えて、歴史学研究が不可欠である。そこで本研究は、腹診に関連する史料を書誌学に分析し、客観的な書誌情報に基づいて腹診その起源と変遷（日本腹診史）を解明することを目的とした。解明に際しては、オントロジーという論理工学的な方法論も用い、新たな研究の可能性も検討する。

3. 研究の方法

(1) 国内における漢方腹診書の現存状況を調査し、現存史料を書誌学的に分析して、各書の歴史的な位置づけを決定した。また、漢方腹診書を補足する内容を含む鍼灸流儀書で、同様の作業も行った。

① これまでの腹診史研究は、半世紀前に提唱された『難経』系（鍼医および後世方派）、『傷寒論』系（古方派）・折衷系（古今折衷派）という分類から脱却できず、紋切型の論述を繰り返すばかりであった。本研究では腹診図の意匠に着目し、腹位図系と腹状図系に史料を大別し、各書の成立と伝播を解明した。日本腹診史の構築に不可欠と思われる漢方腹診書・鍼灸流儀書については、カラー画像を公開し、解題と翻刻を行なった。

② 上記によって判明した客観的な書誌情報に基づき、腹診の理論的根拠・診断の基準・処方との運用といった医史学（各科学説史・臨床文献学）的な考察を行い、腹診の起源と変遷を明らかにした。

(2) 腹診が日本で独自に発達した診察法ならば、「腹診」という熟語も日本で作られた可能性もあり、中国と日本における「腹診」の上限を比較して、「腹診」が和製漢語であるか否かについても検証した。

(3) 小児科と腹診の関係は緊密であった。そこで、小児に対する鍼灸の流儀、すなわち小児鍼と小児灸についても解明した。

(4) 本研究遂行の過程で収集した貴重な史料について、恒久的な保存および研究者への情報提供を容易にすべく、史料の高画質デジタルデータ化を実施した。

(5) 情報科学的手法であるオントロジーが今後の研究に利用可能かどうかを、実際に概

念間の関係を実装し、その解析系を確立した。

4. 研究成果

(1) 調査で判明した腹診史・小児鍼史の解明に不可欠な主たる新史料

①漢方腹診書

『医事秘記』：腹見様を初載した薬方書
〔北山家伝腹診書〕：内科系腹状図の嚙矢
『洞中神法』：臍部を重視する腹診書
『百腹図説』：人体図は版刻で腹状は手彩
『医道伝来系脈』：『百腹図説』の系譜
『濃州車井腹診候』：腹位図の腹状図化
腹状図の腹位図化

②鍼灸流儀書

『救詳鑿』：無分の嗣子・定宗の流儀書
『腹大概之事』：橘隆庵『腹心伝』の祖本
『刺鍼要致』：沢庵自筆の鍼術の理論書
〔朝山流病根図并鍼治法〕：鍼治用腹状図
〔芦田流鍼秘伝〕：鍼治用腹状図

③小児鍼関連書

〔小児養性導引小鏡〕：小児按摩の啓蒙書
『鍼灸薬秘伝書』：小石を用いた小児按摩

(2) 腹診の起源、小児科と腹診の関係

①1300年代初頭の「腹取様」と呼ばれる俗伝の按腹術の中に、腹診の萌芽を発見した（『頓医抄』）。「腹取様」が小児按摩を重視している点は、1500年代に小児科で腹診が本格化してくる遠因の一つと考えられた。
②1300年代中盤には、腹部の脈動で五臓の病邪を鑑別し、処方の選定が服薬の禁忌を決定する「五臓動氣論」が存在した（『福田方』）。原初的な腹診の姿を示す「五臓動氣論」は、『難経』と『傷寒論』の経文を習合して創られており、両系の折衷は腹診史の通説より400年以上も遡ることが明らかになった。史料的には「五臓動氣論」は広く伝播せず立ち消えた模様で、この時期に腹診は一度目の中絶を経験していた。
③1400年代後半、患者の精神安定や服薬介助として按腹術は命脈を保っていた（『壺蘭集』）。同時期に躍進しはじめた馬医たちは、馬体の発生学・解剖学・生理学を「五輪碎」と呼ばれる絵巻で表現した。真言宗の「五臓曼荼羅」を通俗化した「五輪碎」は、1500年代に入ると鍼灸の伝書に転用された。「五輪碎」とは斯様な絵巻である。梵字の「阿」が地水火風空の五輪に砕け、五輪は御仏の口耳鼻舌目の五根を介して、人体の脾腎心肺肝の五臓を生じ、五臓は脊椎左右の兪穴に開き、兪穴から人体の五根と外形（骨肉筋血皮・齒乳爪毛氣）が生じる。生成した人体の上下左右は朱雀・玄武・青竜・白虎に守護されるが、同時に邪悪な三尸・九虫にも寄生される。
④「五輪碎」は鍼と灸を使い分ける根拠とされた。灸治は「五臓の根焼」と呼ばれ、五臓を強化すべく背部の兪穴に施された。これに対し、鍼治は邪虫を排除すべく腹部

に行われた。「五輪碎」の身体観は、鍼立による腹部の触診を促進し、やがて腹診の思想的背景として機能したと考えられた。⑤1500年代中盤になると、鍼治専門の鍼立は、「五臓の根焼」に類する五臓強化の鍼法を創始した。その伝授には絵図が不可欠と考えられ、宋代の解剖図（『頓医抄』所引の『存真図』）を腹壁に投影した腹位図が用いられていた。同時期に、問診の困難性から唾科とも呼ばれる小児科で、腹診の臨床的価値が再認識されていたことを見出した（今川家伝〔治療書〕）。

⑥鍼治の場合は反応点がそのまま鍼穴となるために単一の腹位図で表せる。しかし、薬治の場合は腹部所見と薬方が照応関係にあるため、多数の腹状図が必要とされた。腹位図も腹状図も、和俗の診法にかかる絵図であり、それらに少しでも中国的な正統性を付与するため、既存の脈状図を模した図案が選ばれていたことを見出した。

小児科に限局的とはいえ、薬治の腹診は「五臓動気論」以来200年ぶりの復活であった。腹状図を伴う復活だったにも拘らず、史料上これは一時的な現象で、この後すぐに二度目の中絶を迎えていた。

⑦1600年前後、腹診に関する史料は実践面・言説面ともに急増するが、その担い手は鍼立で、無分（夢分）と意斎が代表格であった。沢庵宗彭の瘡疾を快癒させた無分流の悦公は、経絡（手足）を度外視し、全身のあらゆる疾患を腹部に限局した施鍼で治療していた（『針記』、原名『刺鍼要致』）。

無分流・意斎流の流儀書には、善悪離見付事・大極生死定事（『無分一伝書』）、腹形・腹形事（『無分鍼法鈔』）、腹見様（『意斎流針秘伝』）などの項目が置かれ、腹診の理論化が進展していたことが分かった。彼らの行う打鍼術では、患者の腹部の鍼穴に金か銀の円利鍼を左手で垂直に立て、右手に保持した小槌でその鍼柄を小気味よく叩打して刺入していた。同系の多賀法印流の記述から、術者の左手すなわち押手から伝達される腹部の触感の蓄積が、腹診の技術的深化を促したことが判明した（白行院伝『腹診之法』）。

⑧これまで無分の身辺は判然としなかったが、伊勢・小川の出身者であり、さらに無分→鍼徳→陽名坊→茨木元行という新たな伝授の系譜も判明した（『今新流鍼法伝書』）。茨木元行は、九州国立博物館の所蔵する『針聞書』の編者として知られる。

加えて、無分には定宗という子と無三という孫がいたことも判明した。この定宗と、無分の弟子の意斎は同世代になる。朝廷に仕えて名声を浴する意斎に対し、市井の鍼立（町医）として民衆の鍼治に専念する定宗は相当の反感を抱き、腹診を封印（流儀書から削除）し、診断の主軸を脈診へと転向していたことも判明した（『救詳鑑』）。

⑨1640年代前後、腹診の利用が拡大する過程で、腹位図と腹状図の運用に興味深いねじれ現象が起こった。後代、「腹診伝授家」を標榜する久野家が、鍼治用の腹位図を薬

治用に改編した（『腹診講義』）。そして、意斎流分派の朝山流・奥田流が各々独自の鍼治用の腹状図を考案していた（〔朝山流病根図并鍼治法〕『鍼道秘訣集』）。同じく分派の芦田流も鍼治用の腹状図を用いたが、脈状を模して腹状の図数を24種+7種とし、中国的な体系性を内在させることで正統性の付与を試みていた（『鍼秘伝』）。

⑩1660年代、京都の鍼立（『腹大概之事』の著者）に入門した江戸の内科医が、鍼治と腹診とを分離し、腹診のみを単著として再伝しはじめた（橘隆庵『腹心伝』）。同じ頃、内科の薬治書に鍼立が行う「腹見様」が盛り込まれた（今西玄意伝『医事秘記』）。このことから、脈診を主軸とする正統派（曲直瀬道三流）の内科医が抱いていた和俗の腹診への抵抗感や違和感が、かなり薄らいでいたことが示唆された。

⑪そして腹診は、口授・筆授による少数精鋭への直伝から、開版・頒布によって不特定多数が享受する状況に推移した。和文体の教科書は、沢庵『針記』と意斎流「腹見様」を臆することなく転載した（『鍼灸抜粹』）。教科書の出版に対抗意識を燃やすかのように、夢分流・意斎流の和文体の流儀書が刊行され、腹位図（『合類鍼法奇貨』）や腹状図（『鍼道秘訣集』）が印刷物として流布した。漢文体の流儀書には「探摸法」と称して独自の流儀を開陳するものもあり（『鍼治枢要』）、あるいは「診腹」と称して『内経』『難経』の経文でもって正統性・論理性を高めたものも登場した（『鍼灸遡洄集』）。この過程で高い存在感を示したのは、盲人の鍼立集団であった。彼らは連綿と口承を繰り返し、その傍らで流儀書を筆写させ続けた。近現代の鍼灸界で、腹診が欠くべからざる診察法となったのは、その好影響と考えられた（『医学節要集』腹見様、『杉山真伝流』診腹）。

また、和文体の教科書の中には、「腹見作法」と称して、腹診の風景を挿絵として掲載するものも出現した。術者も患者も中国人風なのは、正統性を付与する試みの一種と考えられた（『鍼科便蒙』）。

(3) 腹診の変遷

①1670年前後、江戸での腹診の牽引役は鍼立ではなく、著名な内科医たちであった。医学講説人（講主治従医）が腹診の伝授を開始し、「腹診」という和製漢語（後述）が急速に広がる契機となった（草刈三越『医教正意』）。その門流からは腹診を主軸とした内科医が輩出した。腹診は、江戸から水府（山敬直方『太極源流三箇書』）や下総（吉永升庵『三越先生腹診伝』）へと東遷した。実は草刈三越は、薬治に腹位図を運用した久野家の時の当主から、腹診の直伝を授かった一人であった。三越は、京都で会得した秘伝の腹診を、江戸の医講堂（私塾）の特別枠（高額）で公開していた。

②腹診の一般化は、江戸幕府の医官の間でも生じていた。橘法印（『腹心伝』）、竹田法印（『診腹精要』）、数原法印（『腹診要伝』）

は公務の傍ら、民間医や医学徒に京都発の腹診を再伝していた。このように、江戸では医学講説人と幕府医官の教育活動が、腹診の第1次ブームを起こしたと考えられた。当然ながら、費用対効果とステイタスは江戸での再伝よりも京都での直伝が勝り、民間医や医学徒の京都遊学が第2次ブームとなった。かかる需要に応じ、久野家5世の玄東が門戸を開放し、「腹診伝授家」を標榜して腹診の教伝を本格化した(『良医名鑑』)。この頃、京都の医学講説人・味岡三伯は遊学ブームに便乗し、臍部を基軸とした腹診書(『洞中神法』の祖本)を入手し、腹診の伝授に新規参入した。けれども高額な伝授料(『腹診伝法』)に比して、内容が希薄(『意仲玄奥』)であると不評を買った。ちなみに、竹田定快法印の腹診は味岡のそれと同系だが、和文の伝書を格調高い漢文に改訂して不評を回避している。そして、和文の漢文化も、中国的正統性を付与するその一形態と考えられた。

③次第に台頭してくる腹診に嫌悪感を抱き、反対意見を述べる内科医も存在した(武田原節『函人録』)。しかし、腹診が広まる時流を抑止するには至らず、1740年中盤には腹診専門の理論書が開版されていた(堀井元仙『腹診書』)。この頃ようやく、腹診は医師たるもの知らずべからずという認識が定着した(養得齋『医者談義』)。

④さて、薬治用の腹状図を内科領域で隔世的に導入したのは、明人の血を引く北山友松子で、1700年前後のことであった(『北山家伝腹診書』)。ただし、友松子は薬治用の腹状図も併用しており(『時習録』)、薬治用の腹状図についても某氏(『時習録』)の先駆作を踏襲した可能性を否定できなかった。北山の名を冠する伝書には42種の腹状図が描かれており、今川家伝(『治療書』)と同じく脈状図を模した図案となっていた。加えて、動気のような陽性の腹状は朱で塗られ、塊のような陰性の腹状は黒で塗られている。陰陽2色の塗り分けは、1760年を過ぎると多色で塗り分けされるように進化した。

⑤薬治用の腹状図を『傷寒論』所出の腹状限定し、「起証」と称して美濃紙1枚に16種の腹状図を描いて伝授したのが、吉益東洞である。この「起証」は1780年代に六角重任の『古方便覧』附録の版画として、広汎に流布していたものである。

⑥東洞の後、腹診は量的拡大と質的向上を遂げることとなるが、『百腹図説』や『診極図説』といった良質の彩色図譜、『腹候経解』『六診提要』といった秀逸な研究書が次々と著され、1800年代の『腹証奇覧』『腹証奇覧翼』の刊行をもって、腹診は診察法としての不動の地位を確立した。

(4) 和製漢語「腹診」について

民国期以前、中国人が腹診の専門書が著した形跡はない。中国で流布した初の腹診専門書は松井操が漢訳した多紀元堅の『診病奇佺』で、光緒4年(明治11/1878)の翻訳、光緒14年(明治21/1888)の刊行

である。中国医学史では、「腹診」の初出文献として清・俞根初『通俗傷寒論』を挙げるが、乾隆41年(1776)成立の原書は現存せず、民国5年(1916)刊行の重訂本が最も古い。原書は7部構成だが、重訂本は12部構成に増補された。「腹診」の初出箇所は、重訂時に挿入された「按胸腹」だが、『漢訳:診病奇佺』が引用する堀井元仙『腹診書』の節録と考えられた。本研究における調査では、『重訂:通俗傷寒論』以前の中国文献には「腹診」の2字を検出できなかった。したがって、熟語「腹診」は清朝末期に『漢訳:診病奇佺』を通じて逆輸入された和製漢語の可能性が極めて高い。

(5) 小児鍼の起源について

ルイス・フロイス(1585年)によれば、日本人は刺絡(瀉血)よりも灸治を好んだ。しかし、龔信『古今医鑑』(1577年)と龔廷賢『万病回春』(1588年)が古活字で和刻(1600年前後)されると、龔父子が考案した青筋(痧病)の砭鍼法を、雲海士流の長生庵了味と妙鍼流の松沢浄室が各々改善を加えて実用化した。両流とも、青筋を日腫、砭鍼を刃鍼、と和俗名で呼んだ。

また、フロイスは成人と同様に小児にも灸治が好まれたと指摘する。けれども、薛鏗『校註小兒直訣』(1551年)・『保嬰撮要』(1522~66年)が薛己『医書十六種』に収録され、それが和刻(1654年)されると、薛父子が提唱した丹毒の磁砭法(磁器の破片による刺絡)を、小児科医の小津三英(『小兒要決集』1693年)と樋口好運(『嬰童医按会萃』1698年)がそのまま採用した。日本の小児科医も実践した丹毒の磁砭法が、やがて《摂州平野大絵図》(1763年)にみえる中野村の小児鍼師に代表される、刺絡による小児鍼へと変容していくものと考えられた。

現行の小児鍼は、刺絡用の鍼具でもって撫で擦るが、明治期に鍼師による刺絡(瀉血)が法的に禁止されたため、鍼具はそのままに、鍼法だけが小石を用いる小児按摩の変法に置き換わったものと考えられた。

(6) 収集した資料の電子化

①収集した文献のうち、資料価値が高いものを中心に電子アーカイブ化を実施した。電子化した文献は76冊(4603ページ)で電子化後の容量は28GBで、そのタイトルは以下の通りである。

有林福田方(全13冊、1090ページ)、賀茂県主官位補任録(全1冊、226ページ)、耆婆五臟経(全1冊、76ページ)、五臟六腑之次第(全1冊、96ページ)、雑事記第1冊および第6冊(全2冊、36ページ)、片玉集第49冊(全1冊、9ページ)、弘賢隨筆第4冊および第57冊(全2冊、14ページ)、押小路文書第90冊(全1冊、4ページ)、奥医師吉田秀貞明細短冊(全1冊、1ページ)、奥医師石坂宗貞明細短冊(全1

冊、1 ページ)、京都より帰着仕候御届 (全 1 冊、2 ページ)、石坂宗哲奥医師召出之節御番料并御扶持方調書技 (全 1 冊、2 ページ)、奥医師誓詞 (全 1 冊、2 ページ)、奥医師石坂宗貞扶持米証文下書 (全 1 冊、2 ページ)、石坂宗貞御証文下書焼失ニ付書抜可進旨致承知候旨手紙 (全 1 冊、2 ページ)、山崎宗運惇宗周奥医師被仰付候ニ付享保廿年松本良席奥医師召出之節御香料調 (全 1 冊、8 ページ)、小普請組支配岡宗益 明細短冊 (全 1 冊、1 ページ)、奥医師杉枝仙貞明細短冊 (全 1 冊、1 ページ)、奥詰医師杉枝仙貞吉田秀貞儀奥医師可被仰付覚 (全 1 冊、1 ページ)、略譜 第 17 冊 (全 1 冊、25 ページ)、西忍流覚書 (全 1 冊、66 ページ)、西忍流口訣之鈔 (全 1 冊、38 ページ)、西忍流配劑療治秘伝文書 (全 1 冊、38 ページ)、西忍流六脉伝並切紙口伝 (全 1 冊、80 ページ)、和漢医伝袖懐集 (全 4 冊、288 ページ)、悲田方 (全 1 冊、54 ページ)、福田方 (1, 2, 3, 4, 7, 10, 11, 12 卷) (全 8 冊、814 ページ)、有林福田方 下冊巻末 (全 1 冊、2 ページ)、摩擦説話 (全 1 冊、29 ページ)、躡引狂歌教草 (全 1 冊、65 ページ)、痧病雨水毒考 (全 1 冊、51 ページ)、痧病治験録 (全 1 冊、49 ページ)、薦腹証図彙文 (全 1 冊、11 ページ)、橘齋先生治験 (全 1 冊、37 ページ)、有林福田方 (全 12 冊、1018 ページ)、薛氏医案和解 (全 5 冊、343 ページ)

(7) 情報科学的手法の書誌学分野への適応

① 情報科学的な手法のうち、オントロジーの書誌学分野への応用の可能性について検討し、有用との結論を得た。その際、特に中医学と日本漢方を対象にしたことで、有用性が明らかになった。その詳細は、漢方と最新治療誌に投稿した査読付き論文の内容を参考にされたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 15 件)

- ① 長野 仁、経絡図との照合による腹状図の明確化—『濃州車井腹診候』における試行—/『濃州車井腹診候』の書誌と翻刻、鍼灸OSAKA、査読無、Vol. 26、No. 4 ~ Vol. 27、No. 1 (合併号)、2011、pp. 1-6/239-245
- ② 三浦研爾、菅野亜紀、長野 仁、山瀬健治、大田美香、小田 剛、後藤修司、西尾久英、松尾雅文、前田英一、西本 隆、高岡 裕、オントロジーによる漢方概念の研究、漢方と最新治療、査読有、Vol. 20、No. 2、2011、pp. 161-167
- ③ 長野 仁、鍼立たちの病の見分け—『鍼秘伝』に描かれた 24 種の腹状図—/『鍼秘伝』の書誌と翻刻—寛永期における鍼用の腹状図の創意—、鍼灸OSAKA、査読

無、Vol. 26、No. 3、2011、pp. 3-8/119-124

- ④ 長野 仁、日本小児鍼史料文献目録：著作・現代篇 (下)、医道の日本、査読無、Vol. 70、No. 2、2011、pp. 186-196
- ⑤ 長野 仁、日本小児鍼史料文献目録：著作・現代篇 (上)、医道の日本、査読無、Vol. 70、No. 1、2011、pp. 214-221
- ⑥ 長野 仁、〔北山家伝腹診書〕の出現—日本腹診史のターニング・ポイント—/〔北山家伝腹診書〕の書誌と翻刻、鍼灸OSAKA、査読無、Vol. 26、No. 2、2010、pp. 1-6/99-109
- ⑦ 長野 仁、高岡 裕、小児鍼の起源について—小児鍼師の誕生とその歴史的背景—、日本医史学雑誌、査読有、Vol. 56、No. 3、2010、pp. 387-414
- ⑧ 長野 仁、小児鍼の歴史をひもとく新史料③—日本における散気の施灸—/鍼と灸のフォークロア①—挿絵に描かれた小児の施灸風景—、鍼灸OSAKA、査読無、Vol. 26、No. 1、2010、pp. 5-6/115-121
- ⑨ 長野 仁、小児鍼の歴史をひもとく新史料②—俳聖・鬼貫の貧乏伝説と小児按摩—/小児按摩から小児鍼へ—養生法としてのストーン・セラピー—、鍼灸OSAKA、査読無、Vol. 25、No. 4、2010、pp. 7-9/103-114
- ⑩ 長野 仁、日本小児鍼史料文献目録：著作・近代篇、医道の日本、査読無、Vol. 69、No. 12、2010、pp. 145-152
- ⑪ 長野 仁、日本小児鍼史料文献目録：中野鍼篇、医道の日本、査読無、Vol. 69、No. 11、2010、pp. 86-91
- ⑫ 長野 仁、根付に表現された鬼貫導引/〈鬼面小児按摩〉について、鍼灸OSAKA、査読無、Vol. 25、No. 3、2009、pp. 3-5
- ⑬ 長野 仁、『日葡辞書』所載の語彙・図法師を冠した灸経—/『図法師灸経』について—、鍼灸OSAKA、査読無、Vol. 25、No. 1、2009、pp. 1-4/103-112
- ⑭ 長野 仁、諸流派形成の黎明期・5—〔室町時代針灸書〕の内景図と穴法図—/〔室町時代針灸書〕について、鍼灸OSAKA、査読無、Vol. 24、No. 4、2009、pp. 1-4/105-113
- ⑮ 長野 仁、もう 1 つのハラノムシ図鑑—五臓之守護并虫之図—/〔五臓之守護并虫之図〕について、鍼灸OSAKA、査読無、Vol. 24、No. 3、2008、pp. 1-4/119-125

[学会発表] (計 21 件)

- ① 長野 仁、小児鍼・皮膚鍼・接触鍼—刺さざる鍼の近代史—、第 1 回鍼灸医学史研究発表会、2011 年 1 月 9 日、北里研究

- 所病院（東京都）
- ② 三浦研爾、長野 仁、高岡 裕、東洋医学理論研究へのオントロジー解析利用の可能性、平成 22 年度日本東洋医学会関西支部例会、2010 年 10 月 24 日、兵庫県医師会館（兵庫県）
- ③ 長野 仁、薛父子と龔父子の著作と刺絡一明・太医院における刺絡の伝来とその変容一、第 19 回日本刺絡学会大阪学術大会（招待講演）、2010 年 6 月 27 日、森ノ宮医療学園専門学校（大阪府）
- ④ 長野 仁、常陸の郷医・山田甫庵の事蹟一《百腹図説》の成立と伝播に関する考察一、日本医史学会第 101 回学術大会、2010 年 6 月 12 日、茨城大学水戸キャンパス（茨城県）
- ⑤ 長野 仁、『中神氏独語』による中神琴溪の伝記再考、第 61 回日本東洋医学会学術総会、2010 年 6 月 6 日、名古屋国際会議場（愛知県）
- ⑥ 三浦研爾、長野 仁、高岡 裕、東洋医学理論構造は多層階層グラフモデルに類似する、第 61 回日本東洋医学会学術総会、2010 年 6 月 5 日、名古屋国際会議場（愛知県）
- ⑦ 長野 仁、身経一術理としての唯掌論一、第 48 回日本鍼灸臨床懇話会全国集会大阪大会、2009 年 11 月 28 日、森ノ宮医療学園専門学校（大阪府）
- ⑧ 長野 仁、日本腹診史における後世方医家の果たした役割一長沢道寿・今西玄意・山田甫庵を中心に一（招待講演）、平成 21 年度 日本東洋医学会 関東甲信越支部 第 1 回東京都部会、2009 年 10 月 18 日、北里大学白金キャンパス（東京都）
- ⑨ 長野 仁、『百腹図説』『五十腹図説』の書誌研究一山田甫庵とその学統について一、第 4 回鍼灸学校教員のための古典講座、2009 年 8 月 6 日、北里大学白金キャンパス（東京都）
- ⑩ 長野 仁、薩摩藩医・宮田尚施の『施治摩要』における刺絡鍼法、日本刺絡学会第 10 回大阪刺絡鍼法基礎講習会、2009 年 7 月 12 日、森ノ宮医療学園専門学校（大阪府）
- ⑪ 長野 仁、新出の無分流伝書『救詳鑑』『針流書』について、第 60 回日本東洋医学会学術総会、2009 年 6 月 20 日、シーサイドホテル芝弥生会館（東京都）
- ⑫ 三浦研爾、長野 仁、西尾久英、大田美香、高岡 裕、東洋医学基本オントロジー構築の試み、第 60 回日本東洋医学会学術総会、2009 年 6 月 20 日、シーサイドホテル芝弥生会館（東京都）
- ⑬ 長野 仁、天理図書館所蔵の明刊本『素問糾略』について、第 110 回日本医史学会総会および学術大会、2009 年 6 月 6 日、アバンセ（佐賀県）
- ⑭ 長野 仁、幕末から明治にかけての漢方（招待講演）、日本東洋医学会 専門制度委員会 関西地区委員会 平成 20 年度 兵庫・大阪・京都合同教育講演会、2009 年 2 月 15 日、京都府立医科大学（京都府）
- ⑮ 長野 仁、『軟経』と『身経』一古典鍼灸の脱構築一、第 10 回全日本鍼灸学会東北支部学術集会、2009 年 1 月 25 日、岩手医科大学（岩手県）
- ⑯ 長野 仁、新出の刺絡文献『市川親平口伝下唇放血法』について、日本刺絡学会第 9 回大阪刺絡鍼法基礎講習会、2008 年 12 月 21 日、森ノ宮医療学園専門学校（大阪府）
- ⑰ 三浦研爾、長野 仁、高岡 裕、東洋医学オントロジーの構築、平成 20 年度日本東洋医学会 関西支部例会、2008 年 10 月 26 日、大阪国際会議場（大阪府）
- ⑱ 長野 仁、インスタント灸による心身のリフレッシュ法、第 2 回 21 世紀統合医療フォーラム、2008 年 10 月 19 日、京都文教大学（京都府）
- ⑲ 長野 仁、小児鍼の形成史一鍼具と鍼法を中心に一（招待講演）、日本小児はり学会 第 2 回学術集会、2008 年 9 月 22 日、森ノ宮医療学園専門学校（大阪府）
- ⑳ 長野 仁、鍼灸流儀書の書誌概説、第 3 回鍼灸学校教員のための古典講座、2008 年 8 月 21 日、北里大学東洋医学総合研究所（東京都）
- ㉑ 長野 仁、黒田藩鍼医・粕谷仲意とその流儀書について、第 59 回日本東洋医学会学術総会、2008 年 6 月 7 日、仙台国際センター（宮城県）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長野 仁 (NAGANO HITOSHI)
神戸大学・大学院医学研究科・医学研究員
研究者番号：40257837

(2) 研究分担者

高岡 裕 (TAKAOKA YUTAKA)
神戸大学・医学部附属病院・准教授
研究者番号：20332281

(H20→H21：連携研究者)

(3) 連携研究者

真柳 誠 (MAYANAGI MAKOTO)
茨城大学・大学院人文科学研究科・教授
研究者番号：20249999
武田 時昌 (TAKEDA TOKIMASA)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：50179644
小曾戸 洋 (KOSOTO HIROSHI)
北里大学・東洋医学総合研究所・部長
研究者番号：90186693